
ツキイチ

なやざ海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツキイチ

【Nコード】

N2130I

【作者名】

なやざ海

【あらすじ】

坂の上にある女子高、聖ヘラクレス学園

この学園には（一部の）生徒たちの心を揺るがせる行事が月に一度行われていた。

限定5食の学食を巡る無礼講レース。運動部の猛者に対抗する帰宅部の主人公。彼女の胃袋ははたして満たされるのか・・・？

登校

何事も、やってみないとわからない。

私は通学用のバッグをつかむと席を立ち、同じ高校の生徒たちと共にバスを降りた。

バス停から5分ほど道なりに歩き、坂を登ったところが私の通う高校だ。猛烈な暑さの夏が終わったとはいえ、まだ日差しが強い。「いつまで夏なんだ・・・」「なんで坂の上に学校なんか建てるんだ・・・」と思いつつみんなダラダラと歩き出す。私もいつもはダラダラと歩くが今日はいつもと違う。キツと学校に目を向けて通学路を歩き出した。月に一度の勝負の日なのだ。

「はよー、・・・て気合入ってんね〜」

と声をかけられ振り向いた私に友人の高橋が半ばあきれながら言った。

「はよ、てか気合入るに決まってるっしょ！」とニヤつと笑って返す。

「松田、普段はヤル気、元氣、ゼロなのにな〜」

隣に並んでツインテールを揺らしながら高橋が笑った。高橋は割りりと髪型を変えるのが好きなのだが最近ツインテールに落ち着いているらしい。私は万年代わり映えのしないボブだ。

「うーん、まあ否定はしないけどさ、普段はこの月一のイベントのために溜めているとお考えください」

「いやいや、溜めすぎだろ!？」

アハハと笑う。笑いながら坂道をずんずん登っていく。朝から元気なやつだ。感心しつつ私も横に並んで他の生徒を抜かしていく。一歩一歩学校に近づいたびいつになく気合が入っていると自分でも感じる。速度が速まり、半ば競争みたいな感じで私と高橋は校門に

着いた。

ふうふうと息を切らしながら昇降口へ向かっていると、グラウンド方向から歩いてくる一団が見える。

どうやらサッカー部が朝練を終えて更衣室へ行くらしい。そのうち頭一つ出ている一人が目についた。

サッカー部二年の本田だ。ショートカットの頭にタオルをかけて歩いている。日焼け対策だろうか？もう十分に焼けているので無意味だと脳内でつつこみをいれる。

「あ、本田来てるね」

ボソツと高橋が呟く。

「うん・・・」

「今日は負けないようにね！」

バシンと肩をたたかれ、ちょっとよろめく。

そんな私たちを本田がちらっと見て通り過ぎていく。その視線はお前なんか、はなから相手じゃねーよと言わんばかりだ。

ちよつとイラつとしたが受け流そうと思っていたら

「松田、負けんじゃねーよ？」

と本田の背中をにらみながら私に低い声で高橋が言う。お前が気合入ってどうする。

「言われるまでもないよ」と返し、視線を彷徨わせる。

目的の看板が見当たらない。いつもは一階の植え込み当たりにあるのに。まさか今日は中止なのか？と不安になっていたら、白い割烹着を着た学食のおばちゃんが看板を持ってきた。看板といってもよくカフェとかで見かける小さな黒板だ。小さな木の椅子に立てかけるのを見届けると看板に駆け寄っていった。

看板にはこう書かれていた。

聖ヘラクレス学園名物！月に一度の学食タダの日！！

当学園のシェフが腕によりをかけてつくった日替わり定食（ごはん
おかわり可）を

無料で提供いたします。ただし限定五食のみ、先着順

今日のメニューは

特選ブタのやわらかジューシーとんかつ

有機野菜のサラダ

とれたてしじみの味噌汁

ほろほろおいしいもの煮物

たきたてご飯

手作りバニラアイス

みなさまの参加を心よりお待ちしております。なお、怪我のなきよう配慮しての行動、お願いいたします。

学食スタッフ一同

私はごくつとつばを飲んだ。と・・・とんかつだと・・・！私の好物ベスト3に入るメニューじゃないか！！今日は絶対に負けるわけにはいかない。毎月連敗だが今日こそは！やわらかジューシーとんかつ・・・うつとりしてしまふ。

「松田・・・よだれ・・・」

「ふへっ？」

高橋の指摘に我に振り返り口元をぬぐう。そんな私を見ながら高橋はあきれたように

「松田、ほんつとゝゝに食い物に関しては、表情が生き生きとするよね」

「そんなにほめられると照れるなあゝゝ」

「うん、ほめてないから」

ばっさりと切られてしまった。続けて

「ずっと思ってたんだけどこんな男子高校生が喜びそうな企画、なんで女子高でやるのかねえ？」

と看板を見ながら呟く。高橋は弁当派なので参加したことはない。「ごはんおかわり自由とかさ、男子なら喜びそうじゃん？でも女子高だよ？そんな量食べないしみんなダイエット」とか言っただけだ。

「えー、でもさ、共学とか男子校だったらきつとケガ人でてすぐ中止になってたと思うよ？それに私、ここの学食で学校決めたからそれなりに宣伝にもなってると思うよ」

学校説明会で来た時に食べた学食を思いつかべる。あの時食べたカレーはおいしかった……。

うつとりと思い出していると高橋がため息混じりに

「……普通の女子高生は制服可愛いからとか将来性とかさ、ちょっとヤル気ない子だと家から近いから、とかだよ？学食理由って初めて聞いたよ」

「そんなにほめられると照れるなあ」

「うん、全っ然ほめてないから！」

……力いっぱい否定されてしまった。

登校（後書き）

はじめまして！

小説を書くのは初めてで読みにくいところも沢山あると思いますが感想とかアドバイスとかあれば是非是非お願いします。

少しでも面白いと思っていただける小説をかけるように頑張ります

廊下

そもそもの始まりは理事長の一言だったらしい。

「学食をつくるならうまいものを安く腹いっぱい」

私なんかはブラボーって拍手したい一言だが高橋からするとそんなことよりもトイレに姿見設置とか購買部の拡大とかの方がいいのと言っていた。どう考えても学食のほうが良いと思うがまた反対されそうなので黙っておいた。口では勝てない事は学習済だ。

話を戻そう。理事長は学食を始めるにあたり、ある友人に声をかけた。その友人はちょうど働いていた高級レストランで料理長のやり方に反発してクビになり職を探していた。

最初は学食なんて・・・と断っていた。だが理事長の情熱はすごかった。

「うちほど君を必要としている場所はない」

「腹のすかせた生徒たちが君の料理を待っている」

「君の料理はどうまい料理を俺は食ったことがない」

更には

「君が引き受けないのならば学食の建設をやめようと思う」とまで言った。

理事長の情熱には涙が出そうだ。私などは拍手喝采なのだが高橋曰く、粘着質な男！らしい。粘着質って・・・反対したかったがぐっと黙っておいた。口で勝てるわけがない。

そこまで言われた友人はとうとう折れた。しかしタダでは引き受けない。ある条件をのんでくれるなら引き受けると言った。

その条件とは普段はちゃんと学食としての料理をするが半年に一度でいいから利益なしで思いっきり良い食材を使って好きなメニューをつくりたい、というものだった。本来ならばそんなわがままは

通用しない。商売としてとらえるならば経営者の怒りを買い、一喝されそうなものだ。

理事長は提案を聞いて一笑した。

「いいじゃないか、君はおもいつきり腕がふるえるし生徒たちはうまい料理が食べられる。半年に一度なんて事は言わず、一ヶ月に一度、五食限定とかどうだろうか？生徒たちはうまい料理が食える機会が増える」

友人はうろたえた。愛想をつかしてこの話は無しになると思っていたのだ。そこで利益について聞いてみた。すると

「利益？まあなんとかなるんじゃないか・・・？」という適当なものだった。

友人は衝撃を受けた。前の職場は利益最優先で材料もかなり粗悪なものを使い、見栄えよく作れと指示されていたのだ。味は当然おちる。あまりにも客を馬鹿にしていなかった料理長に問い詰めると、私のやり方に逆らうのならやめると逆にキレられてクビになったのだ。啞然としていると理事長がにっこり笑って言った。

「利益がいらないとは言わないがうちはあくまで学校だから学食でそこまで利益を得ようとは思っていない。生徒にはうまい学食を食べてリラックスして午後の授業をうけてほしい。」

友人はこの理事長の言葉を聞いて学食で働くことを決意した。少なくとも客を馬鹿にした料理は出さなくて済みそうだから・・・。

「ふうーん」と高橋が興味なさそうに言った。

「ねっ！良い話でしょ！」私は2階の廊下の窓際を歩きながら隣の高橋を見て興奮気味に言った。

高橋はしきり歩きながら冷めた目で私を見て

「いい話っていうかさ、ただのアホな理事長の武勇伝じゃねーの。」一刀両断だ。

力を入れて話をしていただけにショックだ。私が固まっていると高

橋はもう私たちのクラスに入ろうとしていた。慌てて追いかける。

「武勇伝ってそんな一言で……。高橋がいつからこの行事始まったのかな」って言うから話したのに」

「そんなに詳しく知りたいとは言ってないよ。てかなんでそんなに学食の歴史にくわしいのかそっちのが気になるわ」自分の席に座り鞆から教科書を出しながら高橋はちらっと私を見た。私は驚いた。

「何で……。で。生徒手帳に書いてあったよ」

バサツと音をたてて高橋の手から現国の教科書がおちる。

「はあああ！？」突然叫んだ高橋は鞆のポケットから生徒手帳をとりだしパラパラと捲り出した。

高橋が急に大声をあげたせいでびっくりしたクラスメイトがちらほらと私たちの周りに集まる。

「松田ちゃん、高橋どうかしたの？」と高橋の隣の席の小柄な子が聞いてきた。

「学食の歴史が生徒手帳に載ってるっていったら突然叫んだ」すると眉にしわを寄せて

「は？」と一言返した。みんな生徒手帳読んでないのだろうか？けっこう暇つぶしになるのに。

「あ！ホントに載ってる」高橋が力なく生徒手帳のページを開いたまま固まっていた。集まっていたクラスメイト達は高橋の手から生徒手帳を奪うと回し見ている。みんな、理事長の学食にかける情熱を読んで感嘆しているかと思いきや、何故だか微妙な顔をしている。

「この学校、大丈夫だろうか？」と高橋がため息まじりにつぶやいた。

集まったクラスメイト達から公私混同とか理事長熱すぎてウザいとかただの自慢を生徒手帳にのせるんじゃないかねえよとか批判が次々と飛び出していた。

私が大丈夫だよ！理事長と学食最高じゃん！と親指立てながら言

つたら間違いなく口撃されるだろう。最高に敗北しそうなので曖昧に笑っておいた。理事長、学食のシェフ、すまん。

廊下（後書き）

2 話目です。学食のあらましをかいてみました。理事長はピントのずれた感じです。

次でライバルのこととかちよつと出てくる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2130i/>

ツキイチ

2010年10月28日05時38分発行